

日本学術会議 薬学委員会
第 24 期・第 5 回 化学・物理系薬学分科会
議事要旨

日時 令和元年 5 月 10 日(金) 14:00 ～ 16:00
場所 日本学術会議 6 階 会議室
出席者 嶋田委員長、永次副委員長、佐治幹事、樋口幹事、内山委員、
加藤委員、齋藤委員、寺田委員、徳山委員、真鍋委員、山縣委員
欠席者 井上委員、上村委員、尾野村委員、長野委員
陪席 日本学術会議事務局

配布資料 資料 1：第 24 期・第 4 回薬学委員会 化学・物理系薬学分科会 議事録
資料 2：2019 年度会議開催計画に係る第二部予算執行方針について
資料 3：シンポジウムまとめ
資料 4：化学者委員会 研究計画・研究資金検討分科会 薬学分野の大型研究計画評価小
分科会（第 1 回）議事次第
資料 5-1～5-6：薬学委員会 各分科会
資料 6：178 回総会の報告

議事

（１） 前回の議事要旨の確認が行われた。

（２） 本年度の旅費等について

第 1 回の旅費等については担保される。その後（第 2 回目以降）は要相談とされた。
スカイプの使用も考えられるが、今のところ問題も多く、要検討となった。

（３） 平成 30 年 11 月 21 日開催の主催シンポジウムのまとめ

- ・ 80 名の参加者を得た。分野の第一人者がわかりやすく講演を行い、盛会であった。
- ・ シンポジウム開催に当たっては費用が必要であり、日本薬学会から支援いただいている。薬学委員会では、日本薬学会に明確な謝辞を述べる必要があるという意見があり、本分科会でもこの点について賛同を得た。
- ・ 日本生命科学アカデミーへのシンポジウム開催の申請により支援をいただける可能性がある(長野委員からの意見)。
- ・ 本委員の旅費を日本薬学会からの賛助金で支援することはむずかしい(薬学会の規定により、薬学会開催のシンポジウムへ参加する薬学会員の旅費は出費できない規定)。

(4) 次回シンポジウムについて

- ・ 他の分科会と共同しながら開催する手立てもある
- ・ 日程的には今年度行うことはむずかしいため、今年度中に準備を重ね、来年秋（9月？）開催を予定。

(5) 主催シンポジウムのテーマについて

・ 前は物理化学（構造生物学）中心のシンポジウムであったことから、今回は化学中心のシンポジウムとしたらどうか、と嶋田委員長から提案があり、その方向で考えることとなった。議論の結果、中分子（ペプチド、核酸、天然物等）、抗体薬物複合体（ADC）など「ニューモダリティ」を課題とすることが提案（徳山委員）され、糖ミミックや光を用いる新しいがん治療法、抗体なども対象に含めて、「モダリティー」をキーワードとしたテーマでのシンポジウム開催を考えることとした。その結果、以下のように提案がなされた。

1. 糖 岐阜大学・鳥取大学研究者（真鍋委員）
2. 中分子 深瀬先生（新学術領域研究）（徳山委員）
3. 核酸 第一三共（永次委員）
4. 光関連 小林研究員、がん研究センター（？）（樋口委員）
5. 抗体 鹿児島大学（加藤委員）

また、他にホウ素-中性子療法（寺田委員）、結晶スポンジ、ゲノムライト（斎藤委員）なども提案された。

以上の結果に基づいて、徳山委員と真鍋委員を中心にして、演者や講演課題等について、具体的に検討を進めることとなった。→ 5月31日までに素案の作成を依頼

(6) マスタープラン（大型研究）について

・ マスタープラン 2017 で重点大型研究計画に選定された「薬用植物の安定供給と開発のための基盤ネットワーク拠点の構築」（斎藤委員）が現在キャリアオーバーになっているため、審議なしにマスタープラン 2020 に入れる方向で対応することを確認した。なお、次期のマスタープランも今後検討していく必要があることが示された。

(7) 各分科会について

- ・ 薬剤師職能について：看護師が薬を出せるようにトレーニングすることが計画されている。
- 在宅処方箋の変更について：医学・薬学でそれぞれ権利を主張

(8) 178 回総会（4月24日-25日開催）の報告（佐治幹事）

- ・ 会長、副会長、若手フォーラムからの報告があった。
- ・ 本庶先生の講演と、パネルディスカッションについて

- ・ 科研費の配分の仕方の変更についての本庶先生のお考えについても言及された。
- ・ 運営交付金が低下し続ける中で、ベースとなる研究費の必要性、文系と理系とで必要額が異なるので一律とすることの妥当性などの課題が出され、今後も議論していくこととなった。
- ・ 分科会、分野別委員会の開催について
平成31年度の学術会議の財政が厳しいことが予想されることから、第二部会では各分科会、分野別委員会の開催は前半に1回を基本とし、後半での開催を含め、それ以上の開催については要相談とする。また、委員会の開催減少が活動低下につながらないように、ネットやメールの活用も今後考えていくこととなった。
- ・ 科学者委員会：男女共同参画分科会でのアンケートのまとめ、学術会議の認める学術研究協力団体の規則などの調査の実施、研究評価に関するアンケートの実施、ゲノム科学分科会等からのゲノム医療・精密医療の多層的・統合的な推進に関する提言の作成等
- ・ 科学と社会委員会：基礎研究力強化に向けての対応、ゲノム科学分科会等からのゲノム医療・精密医療の多層的・統合的な推進に関する提言の作成等
- ・ 第24期課題別委員会（分野横断的な課題）：認知障害に関する包括的検討、オープンサイエンスの深化と推進に関する検討、HPのtwitter活用等

（9）その他

- ・ 大学院博士課程の院生が減り続けていることについて
博士課程にアジア圏を初めとする外国人がかなり多くなっていることが懸念。
ドクターに行ってもメリットがないということを学生間で伝え合っている。
企業のインターンシップに行き会社が魅力的に感じられる。
博士研究員（ポスドク）の就職は、化学分野は比較的よいが、あまり良好でない分野もある。
留学生に手厚いシステムになっているが、博士課程修了後は母国に帰るケースが多く、留学生が博士課程修了後に日本で活躍する仕組みを作るべきである。
- ・ 就職活動により研究活動が妨げられていることについて
いろいろなところで発言していくべきである。